

古典学関係文献目録

哲学・思想

[単行本]

- 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）『世界哲学史 1——古代Ⅰ 知恵から愛知へ』（ちくま新書，297+xvii 頁，筑摩書房，2020. 1）.
- 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）『世界哲学史 2——古代Ⅱ 世界哲学の成立と展開』（ちくま新書，267+xvii 頁，筑摩書房，2020. 2）.
- 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）『世界哲学史 3——中世Ⅰ 超越と普遍に向けて』（ちくま新書，263+xvii 頁，筑摩書房，2020. 3）.
- 今井正浩・濱岡剛訳（訳），アリストテレス『動物の発生について』（『アリストテレス全集 11』所収，388 頁，岩波書店，2020. 3）.
- 神崎忠昭・野元晋（編）『自然を前にした人間の哲学——古代から近代にかけての 12 の問いかけ』（312 頁，慶應義塾大学出版会，2020. 3）.
- 川本愛（訳），ジャン＝バティスト・グリナ『ストア派』（文庫クセジュ，160 頁，白水社，2020. 1）.
- 小池澄夫・瀬口昌久『ルクレティウス『事物の本性について』——愉しや，嵐の海に』（書物誕生 あたらしい古典入門，296 頁，岩波書店，2020. 8）.
- 酒井健太郎『アリストテレスの知識論——『分析論後書』の統一的解釈の試み』（九州大学人文学叢書，266 頁，九州大学出版会，2020. 4）.
- 土橋茂樹（編）『存在論の再検討』（シリーズ・古典転生，248 頁，月曜社，2020. 3）.
- 土屋睦廣（訳），カルキディウス『プラトン『ティマイオス』註解』（西洋古典叢書，496 頁，京都大学学術出版会，2019. 11）.
- 中野孝次『ローマの哲人 セネカの言葉』（講談社学術文庫，264 頁，講談社，2020. 7）.
- 納富信留『プラトン哲学への旅 ——エロースとは何者か』（NHK 出版新書，238 頁，NHK 出版，2019. 10）.

[論文]

- 稲津阿育『『アルキビアデス第一』における自己認識の構造』（「哲学」71，2020.4）.
- 稲村一隆「テキストの分析と影響関係」（「思想」1143，2019. 7）.
- 稲村一隆「プラトンとアリストテレス」（『世界哲学史 1——古代Ⅰ 知恵から愛知へ』所収，筑摩書房，2020. 1）.
- Iwata, Keiichi, 'Subjecthood and Definability in Aristotle's Investigation of Substance' (in Patricia Hanna (ed.), *An Anthology of Philosophical Studies, Volume 14*, Athens Institute for Education and Research, 2020. 7).
- 上田徹「プラトンと正多面体：プラトンとギリシア数学史」（「筑波哲学」28，2020. 3）.

- 内山勝利「哲人王とデーモクラティアー：『プラトン『国家』：逆説のユートピア』の余白に」（「アルケー」28, 2020. 6）.
- 荻野弘之（訳・註）「ダマスコスのヨアンネス『正統信仰論』第89章（IV 16）「聖画像について」（「哲学科紀要」46, 2020. 3）.
- 荻野弘之「諸問題の系譜——開催の趣旨（上智大学哲学会第91回大会シンポジウム「レトリックと哲学」）」（「哲学論集」49, 2020. 10）.
- 荻原理「ヘレニズムの哲学」（『世界哲学史1——古代Ⅰ 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1）.
- 奥田和夫「最善の国家と次善の国家（「哲人王の行方」補説2）——プラトン『法律』708E-712B, 739A-E, 875C-D」（「法政大学文学部紀要」80, 2020. 3）.
- 角田幸彦「歴史哲学新稿（1）ヘカタイオス（の歴史学）からプラトン（の歴史哲学）まで」（「明治大学教養論集」544, 2019. 12）.
- 角田幸彦「歴史哲学新稿（2ノ1）アウグスティヌスからトレルチ, マイネッケ, レーヴィットまで」（「明治大学教養論集」544, 2019. 12）.
- 金澤修「仕掛けとしての比喩, イメージとしての光——プロティノスの魂論の理解のために」（「哲学誌」61, 2019. 3）.
- 金澤修「ギリシアとインドの出会いと交流」（『世界哲学史1——古代Ⅰ 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1）.
- 金山弥平「共にあること、共に進むこと——プラトン『饗宴』と『プロタゴラス』」（「中部哲学会年報」50, 2019. 7）.
- 金山弥平「古代ギリシアの医学哲学——『古い医術について』とプラトンの hypothesis の方法」（佐々木力（編）『アリーナ 2020 特別号 特集「新しい科学の考え方を求めて——東アジア科学文化の未来』』所収, 中部大学, 2020. 1）.
- 金山弥平「懐疑主義の伝統と継承」（『世界哲学史3——中世Ⅰ 超越と普遍に向けて』所収, 筑摩書房, 2020. 3）.
- 金山弥平「ヘレニズム時代の哲学（1）——幸福とは何か」（「点から線へ」69, 2020. 3）.
- 川本愛「アリストテレスの正義論——人間の中心的能力と国家」（山口雅広・藤本温（編著）『西洋中世の正義論——哲学史的意味と現代的意義』所収, 晃洋書房, 2020. 5）.
- 栗林広明「プラトンと感覚的なものについての知」（「名古屋大学哲学論集」特別号（2020）, 2020. 4）.
- 栗原裕次「ソクラテスとギリシア文化」（『世界哲学史1——古代Ⅰ 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1）.
- 桑原俊介「弁論術的弁証論——ルネサンスにおける弁論術と弁証術の統合とその歴史的な位置づけ」（「哲学論集」49, 2020. 10）.
- 近藤智彦「ローマに入った哲学」（『世界哲学史2——古代Ⅱ 世界哲学の成立と展開』

- 所収, 筑摩書房, 2020. 2).
- 斎藤憲「ギリシア科学」(『世界哲学史 1 ——古代 I 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1).
- 坂井礼文「シュトラウスのプラトン『国家』解釈: 内山氏の読解との比較を交えながら」(「アルケー」28, 2020. 6).
- 酒井健太郎「規範事例型の実践的推論について: アリストテレス『ニコマコス倫理学』の行為論」(「倫理学年報」68, 2019. 3).
- 酒井健太郎「論証と原因——アリストテレス『分析論後書』第2巻第11章を手がかりに」(「哲学」70, 2019. 4).
- 坂下浩司「『形而上学』Γ巻第1章の《存在論》再論——A巻における「第一の諸原理の探求」にとってΓ巻の「存在としての存在」そして或る自然」とはいったい何だったのか」(「古代哲学研究」52, 2020. 6).
- 篠澤和久「「ゼノンの四つの逆理」の文脈的再構成——アリストテレス『自然学』Z巻の構図」(「フィロソフィア・イワテ」50, 2019. 1).
- 高橋久一郎「アリストテレスからの幸福論」(「千葉大学人文研究」49, 2020. 3).
- 田坂さつき「ソクラテスの探究と産婆術: 『テアイテトス』導入部(142a1-151d3)の一解釈」(「立正大学大学院紀要」36, 2020. 3).
- 高橋祥吾「アリストテレス『弁論術』におけるストイケイオン」(「比較論理学研究」17, 2020. 3).
- 立花幸司・相澤康隆・稲村一隆・福岡聡・玉手慎太郎「政治的な事柄を(いま)哲学するということ——アリストテレス『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして」(「教養諸学研究」147・148, 2020. 5).
- 田中龍山「アリストテレス『形而上学』Γ巻における「懐疑主義者」への反論: 「ありかつあらぬ」をめぐって」(「龍谷哲学論集」34, 2020. 1).
- 土橋茂樹「宇宙創造の再現としての神働術——新プラトン主義的自然神学の哲学的背景」(神崎忠昭・野元晋(編)『自然を前にした人間の哲学——古代から近代にかけての12の問いかけ』所収, 慶應義塾大学出版会, 2020. 2).
- 土橋茂樹「「ある」を表示する「名の正しさ」をめぐって——プラトン『クラテュロス』篇解釈史を手がかりに」(土橋茂樹(編)『存在論の再検討』所収, 月曜社, 2020. 2).
- 中島隆博・納富信留「〈対談〉ロゴスと道」(「思想」1154, 2020. 6).
- 中畑正志「アリストテレスは「存在論」を語らない——オントロジーの概念と歴史の再考に向けて」(土橋茂樹(編)『存在論の再検討』所収, 月曜社, 2020. 2).
- 中畑正志「アリストテレス『形而上学』を新たに読むために」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).
- 西岡千尋「『メタフィシカ』M巻4-5章におけるアイデアの再論」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).

- 西岡千尋「形而上学的争点としての数学の対象規定——『メタフシカ』M 卷 2-3 章の二面性を読み解く」(『東京大学哲学研究室論集』38, 2020. 3).
- 西岡千尋「アリストテレス『メタフシカ』E1, 1026a21 の ἀχώριστα」(『フィロロギカ』XV, 2020. 6).
- 西村洋平「プラトン主義の伝統」(『世界哲学史 2——古代 II 世界哲学の成立と展開』所収, 筑摩書房, 2020. 2).
- 西村洋平「『純粹善について』の存在論(一)——初期イスラーム哲学のプラトン主義とアリストテレス主義」(土橋茂樹(編)『存在論の再検討』所収, 月曜社, 2020. 2).
- 西村洋平「古代末期の正義論——ストア派とプラトン主義の場合」(山口雅広, 藤本温(編著)『西洋中世の正義論——哲学史的意味と現代的意義』所収, 晃洋書房, 2020. 5).
- 西村洋平「第 27 論考「魂の諸問題について第 1 篇」(IV.3)——第 1-8 章 われわれの魂は万有の魂の部分か」(『新プラトン主義研究』19, 2020. 3).
- 西村洋平「プロティノスの知性主義」(『古代哲学研究』52, 2020. 6).
- 西村洋平「善が第一原因であるとはどういうことか——新プラトン主義の撰理論」(『フィロソフィア』107, 2020. 6).
- 納富信留「古典文献学の可能性」(『書物学 第 17 巻 特集 編集文献学への誘い』所収, 勉誠出版, 2019. 9).
- 納富信留「世界哲学史に向けて」(『世界哲学史 1——古代 I 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1).
- 納富信留「哲学の誕生をめぐって」(『世界哲学史 1——古代 I 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1).
- 納富信留「黒いアテナ論争」(『世界哲学史 1——古代 I 知恵から愛知へ』所収, 筑摩書房, 2020. 1).
- 納富信留「哲学の世界化と制度・伝統」(『世界哲学史 2——古代 II 世界哲学の成立と展開』所収, 筑摩書房, 2020. 2).
- 納富信留「「ある」の愛求としてのプラトン哲学」(土橋茂樹(編)『存在論の再検討』所収, 月曜社, 2020. 2).
- 納富信留「タレス, あるいは自然哲学の誕生」(神崎忠昭・野元晋(編)『自然を前にした人間の哲学——古代から近代にかけての 12 の問いかけ』所収, 慶應義塾大学出版会, 2020. 2).
- 納富信留「浄めとしてのオリンピック——エンペドクレスの奇跡」(『三田文学』142, 2020. 8).
- 濱岡剛「アリストテレスの形相——素材理論と個体発生」(『経済学論纂』61(1), 2020. 7).
- 樋笠勝士「「存立」(ὄφιστάναι) について——ストア派とプロティノス」(土橋茂樹(編)

- 『存在論の再検討』所収，月曜社，2020. 2).
- 樋笠勝士「プロティノスにおける自然美」(神崎忠昭・野元晋(編)『自然を前にした人間の哲学——古代から近代にかけての12の問いかけ』所収，慶應義塾大学出版会，2020. 2).
- 松井貴英「プラトンと独り語り：『ティマイオス』を中心に」(「名古屋大学哲学論集」特別号(2020)，2020. 4).
- 松浦和也「古代ギリシアの詩から哲学へ」(『世界哲学史1——古代I 知恵から愛知へ』所収，筑摩書房，2020. 1).
- 宮崎文典「ペリクレスの弁論とプラトン『ゴルギアス』」(「哲学論集」49，2020. 10).
- 文景楠「思考の全体と原理」(「東洋文化」100，2020. 3).
- 持地秀紀「説得術としてのレトリックの意義について——アリストテレスからペレルマンへ」(「哲学論集」49，2020. 10).
- 安田将「キケロ『弁論家について』における哲学と弁論術——共和政ローマにおける「政治のための哲学」の構想」(「哲学」71，2020.4).
- 脇條靖弘「Zaltaの基本的対象理論」(「山口大学哲学研究」27，2020. 3).

文学

[単行本]

- 西洋比較演劇研究会(編)『ベスト・プレイズII——西洋古典戯曲13選』(784頁，論創社，2020. 2).
- 高橋宏幸(訳)，オウィディウス『ヘーローイデス——女性たちのギリシア神話』(376頁，平凡社ライブラリー，2020. 1).
- 高橋宏幸(訳)，オウィディウス『変身物語2』(西洋古典叢書，420頁，京都大学学術出版会，2020. 5).
- 中務哲郎(訳)『ホメロス外典／叙事詩逸文集』(西洋古典叢書，492頁，京都大学学術出版会，2020. 3).
- 橋本隆夫(訳)，伝カリストテネス『アレクサンドロス大王物語』(528頁，ちくま学芸文庫，2020. 8).
- 吉川斉『「イソップ寓話」の形成と展開——古代ギリシアから近代日本へ』(374頁，知泉書館，2020. 1).

[論文]

- 上野由貴「ウェルギリウス『農耕詩』における鳥」(「清泉女子大学人文科学研究紀要」41，2020. 3).
- 岡野航星「アルカイオスの琴に捧げる頌歌——ホラーティウス『カルミナ』第1巻32歌を巡って」(「東京大学西洋古典学研究室紀要」11，2019. 8).
- 上村健二『「百合若大臣」と『オデュッセイア』の類似性再考——人物，思想，表現の

- 対応」(「甲子園大学紀要」47, 2020).
- 木和田安寿『『オデュッセイア』第二歌におけるテーレマコスの怒り——σκῆπτρον の用いられ方について」(「文芸学研究」23, 2020. 3).
- 上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』第2巻「シモンの歌」と「最後の晩餐」の関連性——神のアクチュアリティを導く叙事詩」(「神話学研究」2, 2019. 12).
- 西塔由貴子「Μαρμάρεις;『イリアス』の中の輝く世界の一局面を探る」(「文芸学研究」23, 2020. 3).
- 佐野馨「アキレウスはヘーローズと呼ばれているか——『イリアス』における ἥρωες」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).
- 佐野好則『『イリアス』研究における新分析論とその批判的受容』(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).
- 鈴木円「セネカの書簡 88 におけるリベラル・アーツ批判」(「昭和女子大学現代教育研究所紀要」5, 2019. 12).
- 高橋信良「ヨーロッパ演劇の理論的礎——アリストテレスの定義を巡って」(「千葉大学国際教養学研究」4, 2020. 3).
- 高橋宏幸『『農耕詩』第2歌における「接ぎ木」と「多様性」』(「西洋古典論集」25, 2020. 3).
- 高畑時子(訳)「フリードリヒ・フォン・シラー著『トロヤ陥落』(3)(ウェルギリウス『アエネーイス』第二歌の八行詩訳)」(「近畿大学工業高等専門学校研究紀要」12, 2019. 3).
- 高畑時子・子安加奈子(訳)「ウィリアム・ワーズワスによる『アエネーイス』翻訳詩(1 巻序歌)——解題, 和訳および注釈」(「近畿大学工業高等専門学校研究紀要」12, 2020. 3).
- 滝川睦「ヤヌス神にかけて誓って」——『オセロー』と古代ローマ喜劇」(「名古屋大学人文学研究論集」3, 2020. 3).
- 竹下哲文「マーニウス『アストロノミカ』における百科全書主義」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).
- 谷口栄一「教養教育としてのヨーロッパ文学 アクティブラーニング型授業に関する実践と考察(1)——ソポクレス『オイディプス王』を教材として」(「大阪府立大学紀要(人文・社会科学)」68, 2020. 3).
- 玉田敦子「ロンギノス『崇高論』再読——初期ストア派の思想をめぐって」(中部大学人文学部「人文学部研究論集」42, 2019. 7).
- 千葉槇太郎「ポセイディッポス『エピグラム集』19AB と 20AB の解釈と Lithika における位置づけ」(「東京大学西洋古典学研究室紀要」11, 2019. 8).
- 千葉槇太郎「ポセイディッポス『エピグラム集』の Lithika におけるホメロスの利用とオリジナリティ」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).

- 寺田麻佑「アンチゴネをどう読むか——神の法・人の法」（「社会科学ジャーナル」86, 2019. 3）.
- 戸高和弘「ルキアノスのエクプラシス——デュボス『詩画論』からの考察」（「文芸学研究」23, 2020. 3）.
- 鳥山定嗣「ヴァレリー『樹についての対話』における形式と主題——ウェルギリウス『牧歌』の翻訳から変奏へ」（「名古屋大学人文学研究論集」3, 2020. 3）.
- 中金聡「甦るルクレティウス——原子の〈逸れ〉と現代物理学（上）」（「政治哲学」27, 2020. 3）.
- 長澤法幸「サッフォーを読むルネ・ヴィヴィアン——「アフロディテへのオード」の解釈について」（「早稲田大学大学院文学研究科紀要」64, 2019. 3）.
- 長澤法幸「サッフォーを「創る」ルネ・ヴィヴィアン——訳詩集における真正の同性愛者としてのサッフォー像」（「早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌（WASEDA RILAS JOURNAL）」7, 2019. 10）.
- Nakatani, Saiichiro, 'Metamorphosis of *Daphnis and Chloe* in the Far East: Yukio Mishima's *The Sound of Waves (Shiosai)*' in Ian Repath and Fritz-Gregor Herrmann eds., *Some Organic Readings in Narrative, Ancient and Modern*, Eelde, 2019.
- 西井奨「オウィディウス『変身物語』の時代説話とリュカオンの食卓」（「神話学研究」2, 2019. 12）.
- 西井奨「無に帰す長い忠告——オウィディウス『変身物語』第一五巻におけるピュタゴラスの教説の位置付け」（「フィロカリア」37, 2020. 3）.
- 濱田幸子「『伊曾保物語』の成立についての再考察」（「佛教大学総合研究所紀要」27, 2020. 3）.
- 浜本裕美「ヴィクトリア朝英国におけるホメーロス問題」（「ペディラヴィウム——ヘブライズムとヘレニズム研究」74, 2020. 1）.
- 東谷優希「ニーチェの「ホメロス問題」」（「ショーペンハウアー研究」24, 2019. 11）.
- 平野智晴「『オイディプス王』第二スタシモン——「オリュンポスの高きを歩む法」におけるテキスト関係に注目して」（「西洋古典学研究」68, 2020. 3）.
- 平野智晴「Sophocles, *Antigone* 604-10 再考」（「フィロロギカ」15, 2020. 6）.
- 深田孝太郎「ウェルギリウスの導きのもとに——マルグリット・ユルスナールにおけるユマニズムの問題」（東京大学仏語仏文学研究会「仏語仏文学研究」53, 2020. 6）.
- Fukushima, Masayuki, 'Rudimentary Classification of Diseases in the Hippocratic Corpus'（「西洋古典論集」25, 2020. 3）.
- Fukushima, Masayuki, 'The Cardio-Vascular System in *De corde*'（「フィロロギカ」15, 2020. 6）.
- 別府陽子「ゲルダ・ブッデンブロークにおける神話の女神表象——感性の優位について」（「神話学研究」2, 2019. 12）.

- 星野倫「キケローの哲学的著作とダンテ——『饗宴』のモデルをめぐって」(「イタリア学会誌」69, 2019. 10).
- 細井敦子「国立国会図書館蔵 Aristoteles Latinus 写本の周辺」(「フィロロギカ」15, 2020. 6).
- 松浦高志「初期ギリシア語碑文における定型句末の動的 v について」(「フィロロギカ」15, 2020. 6).
- 村山いくみ「『寓意オウィディウス』における『ピラムスとティスベ』——ピラムスの死の動機と寓意的意味」(東京大学仏語仏文学研究会「仏語仏文学研究」52, 2020. 3).
- 八木橋正雄(訳)「テオクリトス 第十二歌「愛される者」」(「プロピレア」25, 2019. 8).
- Yamagata, Naoko, 'Thetis: the Goddess Between Four Worlds' in M. Christopoulos and M. Païzi-Apostolopoulou eds., *The Upper and the Under World in Homeric and Archaic Epic: Proceedings of the 13th International Symposium on the Odyssey, Ithaca, August 25-29, 2017*, Ithaca, 2020.
- Cazzato, Vanessa, 'On Experiencing Japanese Noh and Thinking about Greek Lyric' (「東京大学西洋古典学研究室紀要」11, 2019. 8).
- Ciesko, Martin, 'Philemo 178 K-A, A Brief Commentary' (「西洋古典論集」25, 2020. 3).

史学

[単行本]

- 伊藤雅之『第一次マケドニア戦争とローマ・ヘレニズム諸国の外交』(376 頁, 山川出版社, 2019. 11).
- 川島貞雄(訳), シュタウファー, E.『キリストとローマ皇帝たち——その戦いの歴史』(368 頁, 教文館, 2020. 7).
- 栗原麻子『互酬性と古代民主制——アテナイ民衆法廷における「友愛」と「敵意」』(636 頁, 京都大学学術出版会, 2020. 4).
- 小池和子『カエサル——内戦の時代を駆け抜けた政治家 (岩波新書)』(288 頁, 岩波書店, 2020. 8).
- 阪本浩(訳), ゴールズワーシー, A.『古代ローマ名将列伝』(568 頁, 白水社, 2019. 12).
- 佐藤昇・木曾明子・吉武純夫・平田松吾・半田勝彦(訳), デモステネス『弁論集 6 (西洋古典叢書)』(760 頁, 京都大学学術出版会, 2020. 7).
- 篠原道法『古代アテナイ社会と外国人——ポリスとは何か』(388 頁, 関西学院大学出版会, 2020. 1).
- 周藤芳幸(訳), パウサニアス『ギリシア案内記 2 (西洋古典叢書)』(328 頁, 京都大学学術出版会, 2020. 1).
- 田中創『ローマ史再考——なぜ「首都」コンスタンティノーブルが生まれたのか』(254

頁, NHK 出版, 2020. 8).

中倉玄喜 (編訳), ギボン, E. 『[新訳] ローマ帝国衰亡史 (PHP 文庫)』 (800 頁, PHP 研究所, 2020. 6).

南雲泰輔 (訳), ウォード=パーキンス, B. 『ローマ帝国の崩壊——文明が終わるとい
うこと [新装版]』 (336 頁, 白水社, 2020. 8).

西村昌洋 (訳), シュミット, J. 『ローマ帝国の衰退 (文庫クセジュ)』 (170 頁, 白水社,
2020. 7).

マクリン富佐 (訳), レヴィック, B. 『アウグストゥス——虚像と実像』 (545 頁, 法政
大学出版局, 2020. 8).

弓削達『地中海世界——ギリシア・ローマの歴史 (講談社学術文庫)』 (216 頁, 講談社,
2020. 1).

[論文]

(全般)

浦野聡「論点開示 歴史は何を伝えたか」(「西洋史研究」新輯 48, 2019. 11).

栗原麻子「「歴史資料の現在」によせて」(「西洋史学」268, 2019. 12).

南雲泰輔「西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念の新展開」(「思想」1149, 2020. 1).

南川高志「思想の言葉 二一世紀の歴史学と時代区分」(「思想」1149, 2020. 1).

(ギリシア・ヘレニズム史)

秋山学「史の時代から個の時代へ——紀元前 4 世紀ギリシアが意味するもの」(「筑波大
学地域研究」41, 2020. 3).

伊藤雅之「アイトリアのドリマコス」(鈴木董 (編)『狭の歴史 西洋編上+中東編』所
収, 清水書院, 2020. 7).

内川勇海 (訳), ローズ, P. 「アテナイの民会と 500 人評議会——継続する諸問題」(「ク
リオ」34, 2020. 7).

大野普希「パウサニアスのギリシア観——ローカルな次元からの再解釈」(「西洋古代史
研究」19, 2019. 12).

加藤聡一郎「アギスとクレオメネスの改革——スパルタ社会の実像と改革の本質」(「ク
リオ」34, 2020. 7).

菊地のどか「野心的な陶工たち——プトレマイオス朝時代のファイユーム出土パピルス
文書から」(「古代文化」71-3, 2019. 12).

齋藤貴弘「「郊外」(上野慎也「郊外——古典期のアテーナイ」(浦野聡編『古代地中海
の聖域と社会』勉誠出版、2017、49-105))に寄せて——古代ギリシアの「聖-俗」
空間についての覚え書」(「愛媛大学法文学部論集 人文学編」48, 2020. 2).

櫻井かおり「ファラオとしてのクレオパトラ——プトレマイオス朝後の五重称号を中心
に」(「関西大学西洋史論叢」21, 2019. 3).

佐藤昇 (訳), カネヴァロ, M. 「アテナイ民会における民主的熟議——正当性を得るた

- めの手続きと行動」(「クリオ」34, 2020.7).
- 澤田典子「ギリシア世界における権力者崇拜(2)——フィリポス2世からアレクサンドロスへ」(「千葉大学教育学部研究紀要」68, 2020.3).
- 芝川治「南イタリアの僭主政」(「大手前大学論集」19, 2019.9).
- 杉本陽奈子「紀元前4世紀アテナイの商業裁判に関する訴訟と証言」(「西洋史学」269, 2020.6).
- 周藤芳幸「アナクシラス再考——パウサニアスのメッセニア戦争とオリュンピア期をめぐって」(「西洋古典学研究」68, 2020.3).
- 高畠純夫「ソロン」(鈴木董(編)『俠の歴史 西洋編上+中東編』所収, 清水書院, 2020.7).
- 高畠純夫「デモステネス」(鈴木董(編)『俠の歴史 西洋編上+中東編』所収, 清水書院, 2020.7).
- 竹内一博「アッティカのデーモス碑文」(「歴史と地理」730, 2020.2).
- 中井義明「前4世紀民主政建設期のアテナイ——帝国と内戦の記憶とその効用」(「文化史学」75, 2019.11).
- 長谷川岳男「大レトラとタラス建市——古典期スパルタ社会の形成について」(「東洋大学文学部紀要 史学科篇」45, 2020.3).
- 畑潤「古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究(15) W. イェーガーの『パイディア』に学ぶ」(「都留文科大学研究紀要」91, 2020.3).
- 畑潤「古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究(16) W. イェーガーの『パイディア』に学ぶ」(「都留文科大学大学院研究紀要」24, 2020.3).
- 藤井崇(訳), ハニオティス, A.「誰も寝てはならぬ!——夜のギリシア」(「思想」1154, 2020.6).
- 古山正人「ヘイロータイの階級規定——近年の研究動向から考える」(「國學院大學大学院紀要 文学研究科」51, 2020.2).
- 前野弘志「太陽の中の影:3世紀——PGM VII. 846-861」(「史学研究」304, 2019.10).
- 前野弘志「眠らせない魔術:4世紀前半——PGM XII. 376-396」(「西洋史学報」46, 2019.8).
- 前野弘志「『ギリシア語魔術パピルス』にみる魔術師たちの自画像」(「史学研究」305, 2020.3).
- 師尾晶子「極右政党「黄金の夜明け」の台頭と極左連合政権下のギリシアにおける古典教育と古代史の再定義」(「歴史学研究」997, 2020.6).
- (ローマ史)
- アウレリウス・ウィクトル研究会(代表:豊田浩志)(訳)「アウレリウス・ウィクトル『皇帝列伝』翻訳(5)」(「上智史學」64, 2019.11).
- 飯坂晃治「古代ローマにおける狩獵」(「別府大学アジア歴史文化研究所報」20, 2020.3).

- 五十君麻里子「古代ローマにおける解放奴隷の扶養に関する一考察——Q. C. スカエウ
ォラ法文学説彙纂 34 卷 1 章 16 法文 1 項を手掛かりに」(「法政研究」86-3, 2019. 12).
- 池口守「ローマ期ティレニア海沿岸の港湾インフラの発達と海上輸送費の低下」(「久留
米大学文学部紀要 国際文化学科編」36, 2019. 9).
- 池口守「動物考古学資料の活用——古代ローマ史を中心に」(「西洋史学」268, 2019. 12).
- 石川真人「占有は事実か法か——2007 年 10 月 24 日の *Bürge* ゼミ」(「ローマ法雑誌」1,
2020. 3).
- 糸隆太「帝政期イタリアにおける家畜生産とローマ市への供給」(「早稲田大学大学院文
学研究科紀要」65, 2020. 3).
- Heredia-Chimeno, C. 'Concord and Instability in the Action of M. Aemilius Lepidus (cos. 78
BC)' (「西洋古代史研究」19, 2019. 12).
- 奥山広規「2018 年度オスティア・アンティカ遺跡グラフィッティ調査報告」(「西洋史
学報」46, 2019. 8).
- 楠田直樹「もう一つのローマの歴史 *origo gentis romanae* について」(「創価女子短期大
学紀要」51, 2020. 2).
- 児玉寛「ニーブーア『ローマ史』序文の翻訳と訳注 (1) モッミリャーノの定式とニー
ブーア」(「龍谷法学」52-4, 2020. 3).
- 小堀馨子「デルポイの神託——共和政期ローマ人はそれにどのように対応したか」(杉
木恒彦・高井啓介 (編)『霊と交流する人びと——媒介者の宗教史【下巻】』所収,
リトン, 2018. 12).
- 小堀馨子「古代ローマにおけるト占」(勝又悦子・柴田大輔・志田雅宏・高井啓介 (編)
『一神教世界の中のユダヤ教 市川裕先生献呈論文集』所収, リトン, 2020. 1).
- 佐々木健「ローマ法の参照例——占有訴権と明文なき物権的請求権」(「法律時報」92-4,
2020. 4).
- 島創平「なぜキリスト教は「有害な迷信」とみなされたか——ローマ人とキリスト教」
(「東洋英和大学院紀要」16, 2020. 3).
- 新保良明「セネカ」(鈴木董 (編)『俵の歴史 西洋編上+中東編』所収, 清水書院, 2020.
7).
- 砂田徹「グラックス兄弟」(鈴木董 (編)『俵の歴史 西洋編上+中東編』所収, 清水書
院, 2020. 7).
- 田中創「教会史の系譜——ローマ帝政後期における歴史叙述の伝統と変容」(「西洋史研
究」新輯 48, 2019. 11).
- 豊田浩志「人間アウグスティヌスを『告白』から探る」(上智大学史学科 (編)『歴史家
の調弦』所収, 上智大学出版, 2019. 7).
- 中川亜希「記憶の断罪 *damnatio memoriae*」——史料から見る古代ローマの名誉と不名
誉」(上智大学史学科 (編)『歴史家の調弦』所収, 上智大学出版, 2019. 7).

- 中川亜希・本村凌二「ハドリアヌス帝の属州視察の諸問題」(「上智史學」64, 2019. 11).
- 中西恭子「ローマ帝国の「キリスト教化」とユダヤ教——コンスタンティヌス朝からテオドシウス朝まで」(「ユダヤ・イスラエル研究」33, 2019. 12).
- 長谷川敬「人々が暮らす国境の「水空間」——帝政ローマ前期、生活の場としてのライン河口域とその周辺内水域」(「史潮」86, 2019. 12).
- 比佐篤「共和政ローマにおける初期の貨幣に描かれた図像の再解釈」(「関西大学西洋史論叢」21, 2019. 3).
- 平田隆一「ルーヴル博物館所蔵のエトルスキ語およびイタリック語碑銘文資料——Dominique Briquel, *Catalogue des Inscriptions Étrusques et Italiques du Musée du Louvre*, Picard 2016 を読む」(「ヨーロッパ文化史研究」21, 2020. 3).
- 増永理考「ローマ帝政前期小アジアにおける文化資本——経済的持続性を中心に」(「史林」102-4, 2019. 7).
- 増永理考「ローマ帝国統治下リュキアにおける善行と都市——大善行者オプラモアスの恵与を中心に」(「西洋古典学研究」68, 2020. 3).
- 松村一男「古代ローマにおける神々の戦争——キリスト教化への過程」(「東京大学宗教学年報」37, 2020. 3).
- 松原俊文「記憶(メモリア)と政治——ローマの政治文化における歴史の役割」(「西洋史研究」新輯48, 2019. 11).
- 丸亀裕司「ローマ共和政末期の政治と弁論——キケロ『ポンペイウスの指揮権について』(前66年)を手がかりに」(「西洋史研究」新輯48, 2019. 11).
- 宮坂渉「Tabulae Pompeianae Sulpiciorum 78に見る1世紀プテオリの取引と法の実像」(「ローマ法雑誌」1, 2020. 3).
- 宮寄麻子「ローマ帝国形成期における政治問題としての海賊」(「西洋史学論集」57, 2020. 3).
- 森光「D. 39, 2, 47——古代ローマ法における建物と建物の境界について」(「法学新報」126-7・8, 2020. 1).
- 山本興一郎「大ポンペイウスと息子たち」(鈴木董(編)『俠の歴史 西洋編上+中東編』所収, 清水書院, 2020. 7).
- 鷲田睦朗「「民衆派」と「閥族派」は滅ぼさねばならない——ローマ共和政後期における政治状況の理解に向けて」(「パブリック・ヒストリー」17, 2020. 2).
- 早稲田大学ローマ法研究会(訳), パウルス「パウルス『意見集』(V)」(「早稲田法学」95-2, 2020. 3).

美術・考古学

[単行本]

瀧本みわ・長谷川敬(訳), クーロン, G., ゴルヴァン, J.-Cl. 『絵で旅するローマ帝国

時代のガリア 古代の建築・文化・暮らし』(208頁、マール社、2019.12).

[論文]

阿部拓児「ウズン・ユヴァの「ヘカトムノス廟」——発見、整備とその真正性」(「フェネストラ」3, 2019.9).

有村元春「エジプト出土のミケーネ土器模造品——製作技法及び出土状況からの再検討」(「西アジア考古学」21, 2020.3).

Osada, Toshihiro, 'Rethinking the Parthenon Frieze as a Votive List of Dedicator, Recipient, and Beneficiary' (*Jahrbuch des Deutschen Archäologischen Instituts*, 134, 2020. 2).

長田年弘「パルテノン・フリーズ東面聖衣奉納場面に関する小論」(「藝叢」34, 2020.3).

Osada, Toshihiro, 'Die Darstellung der Asylie bei Kindern, Alten und Frauen in der attischen Kunst aus dem 6. und 5. Jahrhundert v. Chr.' (in L. M. Berger, L. Huber, F. Lang, J. Wielhartner, Hg., *Akten des 17. Österreichischen Archäologentages am Fachbereich Altertumswissenschaften, Klassische und Frühgriechische Archäologie der Universität Salzburg vom 26. bis 28. Februar 2018* (Salzburg), 2020. 4).

小山琢「ギリシア・ミノア文明における宮殿の諸相——中庭の長短比率の分析を通して」(「名古屋大学人文学フォーラム」3, 2020.3).

周藤芳幸「サモスのヘライオン——ギリシアにおける「発掘ポリティクス」の一考察」(「歴史学研究」997, 2020.6).

高橋裕子「アルゴリスの後期青銅器時代 III C 期における墓制と社会——火葬墓を伴う墳丘墓の資料紹介を中心に」(「西洋史研究」新輯 48, 2019.11).

高橋裕子「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代 III C 期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」(「マテシス・ウニウエルサリス」21-2, 2020.3).

高橋裕子「ギリシアの初期鉄器時代における車輪付き土製品とその社会的背景」(「地中海学研究」43, 2020.5).

田中咲子「古代ギリシアの陶器画におけるアスリート図像——前5世紀のメディアとしての陶器画試論」(「DNP 文化振興財団学術研究助成紀要」2, 2019.10).

Takimoto, Miwa, 'Le goût littéraire des aristocraties africaines: l'écriture dans les mosaïques de l'Afrique proconsulaire' (「Aspects of Problems in Western Art History 東京芸術大学西洋美術史研究室紀要」17, 2019.12).

辻成史「ヴェルギナ、地下墓廟正面装飾フリーズについて——「古代ローマ風景画の誕生」序説」(「ヘレニズム～イスラーム考古学研究」2019, 2019.12).

中嶋泰史・吉武隆一「古代マケドニア王国の首都ペラの王宮に関する調査報告(4)——建物Iの建築部材と原位置の推定」(「建築歴史・意匠」2019, 2019.7).

中西麻澄「古代ローマの皇帝親衛騎馬部隊騎士の墓碑——その身分と浮彫馬事図像」(「地中海学研究」43, 2020.5).

中村るい「ギリシャ美術の身体イメージを読む」(和氣健二郎・養老孟司・後藤仁敏・

- 坂井建雄・布施英利（編）『発生と進化——三木成夫記念シンポジウム記録集成』所収，哲学堂出版，2020. 3).
- 花坂哲「履物の副葬とその象徴性——エジプト・アコリス遺跡南区の庶民墓の事例から」（『西アジア考古学』21，2020. 3).
- 藤沢桜子「古代ローマ邸宅の美術と教養——『サテュリコン』主人公エンコルピウスによる神話画の鑑賞から」（『群馬県立女子大学紀要』41，2020. 2).
- 武関彩瑛「神官アマンドゥスの家の画家」研究——古代ローマ壁画における画家の分業化の可能性について」（『美術史学』41，2020. 3).
- 宮坂朋「アッティス——ヴィア・ラティーナ・カタコンベ壁画と古代末期のシンクレティズム」（『人文社会科学論叢』7，2019. 8).
- 宮坂朋「商業神ヘラクレス——ヴィア・ラティーナ・カタコンベ墓室 N 壁画の図像解釈」（『人文社会科学論叢』9，2020. 8).
- 山本瑛美子・吉武隆一「古代マケドニア王国の首都ペラの王宮に関する調査報告（5）——比例分析によるドリス式柱頭の年代推定」（『建築歴史・意匠』2019，2019. 7).

一般

[単行本]

- 有地京子『名画で味わうギリシャ神話の世界——神々・美女・英雄たちの愛の物語』（210頁，大修館書店，2020. 3).
- 加我君孝『ヒポクラテスを超えて』（192頁，医学と看護社，2020. 6).
- 金光仁三郎・小井戸光彦・本田貴久・大木勲・内藤真奈（訳），ベルフィオール，J. -C. 『ラールス ギリシア・ローマ神話大事典』（1039頁，大修館書店，2020. 6).
- 橘明美（訳），マルクス・シドニウス・ファルクス，トナー，J. 『奴隷のしつけ方（ちくま文庫）』（288頁，筑摩書房，2020. 4).
- 前田耕作（監修），アドキンズ，L.，アドキンズ，R. 『ローマ宗教文化事典』（496頁，原書房，2019. 9).
- 宮崎真紀（訳），ビアード，M. 『舌を抜かれる女たち』（132頁，晶文社，2020. 1).
- [論文・エッセイ]
- 足立広明「浅香先生と文化史学——これまでとこれからを繋ぐ糸」（『文化史学』75，2019. 11).
- 阿部拓児「アケメネス朝ペルシアの表象と現実」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020. 4).
- 荒井献「初期キリスト教における「神の国」の諸相」（『日本學士院紀要』74-3，2020. 4).
- 飯坂晃治「読書案内 ローマ帝国の支配構造」（『歴史と地理』732，2020. 5).
- 五十君麻里子「ロルフ・クニニューテル先生を偲んで」（『ローマ法雑誌』1，2020. 3).

- 池口守「古代経済史論争」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 石井正人「ラテン語の *conjugatio periphrastica* について」(「千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書」352, 2020. 2).
- 石田真衣「コイナー」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 井上浩一「ビザンツ帝国史の時代区分」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 井上文則「五賢帝時代と「3世紀の危機」」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 上村一則「D. ネル教授の追悼式典と記念シンポジウムの開催について」(「ローマ法雑誌」1, 2020. 3).
- 大清水裕「強制国家論の現在」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 大谷哲・幸村誠・小澤実・松本涼・伊藤盡・中丸 禎子「『ヴィンランド・サガ』の世界を語る! 歴史とサガとエンターテイメント!——せんだい歴史学カフェ座談会幸村誠氏を囲んで」(「東海大学紀要 文学部」110, 2020. 3).
- 大谷哲「キリスト教の拡大」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 岡田泰介「アテネの陶器画に見る「スキタイ人」」(「地中海学会月報」426, 2020. 1).
- 葛西康德(訳), チュール, G. 「デモステネスは弁護士か?」(「西洋古典叢書月報」146, 2020. 7).
- 勝又俊雄「アリアドネの糸が紡ぐ古代ヘレニズム-ローマ文化と17世紀オランダ文化——飽食ととめない雑談」(「宝塚大学紀要」33, 2020. 3).
- 川島重成「パルナッソス山とコリュキオン洞窟」(「西洋古典叢書月報」143, 2020. 1).
- 河島思朗「アンナ・ペレンナの聖なる泉」(「地中海学会月報」428, 2020. 3).
- 河島思朗「オウィディウスが伝える物語の力」(「西洋古典叢書月報」145, 2020. 5).
- 岸本廣大「古代ギリシアの連邦とその受容」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 栗原麻子「アテナイの演劇と社会」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 桑山由文「ローマ帝政期のギリシア」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).

- 古賀邦正「酒の来歴 (9) ワインとビール (その 6) アレクサンドロス大王の登場と古代ローマの台頭」(『文理シナジー』23-2, 2019. 10).
- 小島和男「地中海のうどん——パスタ」(『地中海学会月報』427, 2020. 2).
- 小堀馨子「古代人の宗教 3: 国家と宗教」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透 (編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 紺谷由紀「去勢されたのは誰?——ヘレクレイオス帝 (在位 610-41 年) の家族の身体切断に関する小考」(『地中海学会月報』428, 2020. 3).
- 斎藤憲「古代ギリシャの (巨大) 数」(『現代思想』47-15, 2019. 12).
- 齋藤貴弘「「松山=ポリス」私 (試) 論と「お接待」」(『地中海学会月報』430, 2020. 5).
- 阪本浩「学長 Interview 意識するのは上智と立教 入試改革は論述式を重視」(『週刊ダイヤモンド』108-11, 2020. 3).
- 阪本浩「Interview 学長に聞く オンラインは緊急避難措置 青学の真髄は対面授業だ」(『週刊ダイヤモンド』108-31, 2020. 8).
- 佐々木健「スペッコ便り 2019」(『ローマ法雑誌』1, 2020. 3).
- 佐藤昇「自著を語る 100 『英雄伝』の挑戦——新たなプルタルコス像に迫る』」(『地中海学会月報』427, 2020. 2).
- 佐藤昇「アテナイ「帝国」と民主政」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透 (編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 佐藤昇「アテナイの疫病と名演説の妙」(『地中海学会月報』430, 2020. 5).
- 佐野好則「叙事詩圏とトロイア遺跡と木馬の策略と」(『西洋古典叢書月報』144, 2020. 3).
- 澤井直「古代の科学: ガレノスを中心に」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透 (編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 澤田典子「『アレクサンドロス伝説』のひろがり」(橋本隆夫 (訳), 伝カリストテネス『アレクサンドロス大王物語 (ちくま学芸文庫)』所収, 筑摩書房, 2020. 8).
- 志内一興「ローマ皇帝と帝国の統合」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透 (編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 島田誠「中野隆生さんとの思い出」(『学習院史学』58, 2020. 3).
- 庄子大亮「ブラック・アテナ論争」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透 (編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 新保良明「台風 19 号がもたらした大きな水害——まだ終わらない災害復旧」(『図書館雑誌』114-3, 2020. 3).
- 菅尾暁「エディンバラ紀行文」(『ローマ法雑誌』1, 2020. 3).
- 周藤芳幸「ホメロスの社会」(金澤周作 (監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優

- 一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 高橋亮介「古代ローマの家族とセクシュアリティ」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 竹尾美里「ポリス形成論」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 田中創「ローマ法典と社会」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 千葉恵「福音と律法——パウロ「ローマ書」における信の根源性」（『独立教法』420，2020.2).
- 出村みや子「教父の聖書解釈におけるジェンダー理解——創世記一六章の解釈を手掛かりにして」（『宗教研究』93-2，2019.9).
- 中谷功治「ビザンツ皇帝とは何か」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 中村治「西洋古典と中世宇宙論」（『西洋古典叢書月報』142，2019.11).
- 中村純「アポロギア」（『法政史学』93，2020.3).
- 中村るい「ギリシア・ローマ文化の受容史研究の広がり」（『地中海学会月報』424，2019.11).
- 南雲泰輔「「古代末期」論争」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 西村昌洋「ローマ帝国衰亡論」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 長谷川岳男「アレクサンドロス大王と「ヘレニズム論争」」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 疋田隆康「ケルト問題」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 福井憲彦・本村凌二「「他律」に陥る人類への処方箋」（『Voice』506，2020.2).
- 福本薫「古代人の宗教2：神話と造形芸術」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 福山佑子「古代の奴隷」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).
- 藤井崇「ヘレニズム期の王権とポリス」（金澤周作（監修），藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透（編著）『論点・西洋史学』所収，ミネルヴァ書房，2020.4).

- 松村一男「東西南北 ギリシア神話とギリシアの風土」(「青淵」857, 2020. 8).
- 松本宣郎「地域との連携を進め選ばれる大学に」(「東北ジャーナル」37-9, 2019. 9).
- 松本宣郎「北イタリア古代遺跡紀行」(「東北学院大学キリスト教文化研究所紀要」38, 2020. 6).
- 丸亀裕司「ローマ共和政の本質とアウグストゥス」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 南川高志「西洋古代史の泉 12——ローマ化とラテン語」(「西洋古代史研究」19, 2019. 12).
- 南川高志「「ローマ化」論争」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 本村凌二「ヨーロッパの神髄 ローマ帝国 ローマ史は人類の縮図 滅亡の歴史に何を学ぶか」(「週刊東洋経済」6895, 2019. 12).
- 本村凌二「東大名誉教授がおしえるやばい比較史——古代日本と古代ローマ」(「週刊ダイヤモンド」108-7, 2020. 2).
- 本村凌二「美の随想 美しい情景の競馬場は失意を癒す」(「紫明」46, 2020. 3).
- 本村凌二「剣闘士競技」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 本村凌二「「ローマ型独裁制」から学ぶべきもの」(「Voice」510, 2020. 6).
- 本村凌二「裾野を広げれば、おのずと高みへゆく 「格闘する」にふさわしい本を」(「望星」51-8, 2020. 8).
- 師尾晶子「歴史叙述起源論」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 安井萌「研究フォーラム 古代ローマにおける歴史記述の始まり」(「歴史と地理」728, 2019. 11).
- 山内暁子「古代人の宗教 1: 犠牲」(金澤周作(監修), 藤井崇・青谷秀紀・古谷大輔・坂本優一郎・小野沢透(編著)『論点・西洋史学』所収, ミネルヴァ書房, 2020. 4).
- 山内昌之・本村凌二・佐藤優「鼎談 AI 社会が直面する見えざる脅威 疫病という「世界史の逆襲」」(「中央公論」134-4, 2020. 4).
- 山沢孝至「なまじラテン語を学んだがために不思議に思うこと」(「近代」120, 2019. 12).
- (作成: 河田真由子, 勝又泰洋, 増永理考)